

(2) 防災教育の効果



畦地：皆さんからそれぞれ非常に興味深いお話を聞かせて頂きました。その中でも、教育関係者の集まりなので、子どもたちの変化、教育効果が一番興味関心がある部分ではなかろうかと思うんです。皆さんのお話に出てきたのは、防災教育をやることによって子どもたちの『学びに対する意欲』とか『いろんな活動に対する意欲』だとか、あるいは『自己有用感』が高まっている。そして、その結果として、五十嵐先生のところでは、学力も上がるのではないかということとかですね。それから、防災に関しては、興味に関して学力レベルの差がないというお話もありましたよね。それは、どうしてでしょう。私は教員ではなく、一般行政職員なので、あまり教育に明るくないので、「なぜ防災教育はそのように子どもたちの意欲を高めることができるのか」という点について、何か思ってます先生、いらっしゃいませんか。

嶋口：先ほど五十嵐先生から「学力が上がった」ことについて、「何らかの要素が学力を上げ、底上げとなったのではないか」とお話があったと思います。田辺市では1学期に手引きを使った授業をやって、その成果と課題を先生方にまとめてもらったんです。それで、成果がたくさん出

てきたんですけども、特に「特別支援学級の生徒にとって、非常にわかりやすい内容だった」と、複数のグループから出てきたんです。

昨日の宮川先生の発表にもあったように、単元の最初に、学習の過程を提示するなど、今は授業のユニバーサルデザインが指摘されていますが、『防災の授業』という視点で切り取った時に、イラストであるとか写真であるとか、視覚的に提示することが、わかりやすさにつながっているのではないかと。

それから、『学力の3要素』として、『学習意欲』、『基礎的・基本的な知識の習得』、『思考力・判断力・表現力の育成』があると思うんですけど、3つが非常にクロスしていると思うんですね。例えば、田辺市の場合、手引きだと、「大雨が降ったときの危険について知る」。これが『知識の習得』だと思うんです。次に、クロスロードを用いて、「災害の対応について、自らの問題として考え、様々な価値観を共有する」。これは、『思考・判断・表現』だと思うんです。また、沿岸部の指導案の中には、「故郷を生き、自分たちの手で守っていかこうとする心情を育む」とあります。これは、『意欲』だと思うんです。そういう国が示している3つの学力と防災教育は、非常に合っているのかなと思います。

森本：今のお話も伺っていて、自分も釜石東中学校で、防災教育を学年でもやり、教科教育でもやり、全校でもやりました。子どものふり返りを聞いていると、子どもたちに「結びつく」と言われます。例えば、「知識として習ったことが、訓練の中で結びつく」ということです。だから、学習が本当にくるくる連鎖をしていく。先ほどおっしゃっていた『思考力・判断力』につながる。「やっぱり大事なものは、自分たちで考える学習が大事なんだ」ということは、多くの生徒から出てきます。『考えることの重要性』が、彼らの口から出てくるんです。

だから、私も『学力』より『どういう力が身に付いたのか』を整理したいと思っています。おそらく、子どもたちが『すっかり忘れている学習』、『これは忘れてもいいんじゃないかという学習』と、『これは大事だったという学習』、『避難の時に本当に活きた学習』と思っているものと、実際に教師がそれをどういう形態で教えていたのかは、結びつくのではないかと思います。子どもたちが『主体的に学んだり、体験したり、考えた』ことは残ってくるし、『実際の避難の時に生きてきた』のではないかと。

そして、もう一つは、命に関わることなので、彼らにとっても切実な課題です。この課題に対して、自分自身はどうするのか。家族のこととか地域のことも考えて、総合的な学習をやっていくと、課題に対する意識が高くなります。そうすると、その分、学びが深くなるのではないかと。総合的な学習の時間を充実させている学校と学力の相関関係は、文科省から出ていますが、同様の相関が見られるのではないかと思います。

畦地：『学んだこと』が、『自分のこととして結びつく』『社会、生活に結びつく』ということですね。

森本：子どもたちの中で、知識レベルでそれが避難行動にも結びつきますし、『学校で習ったこと』と『家庭でのこと』も結びつく。例えば、靴を揃えることは、家庭でも同じようなことを言わ

れるわけですね。『学校でやったこと』と『家庭でやったこと』が結びついたり、『地域の活動』が結びついたりする。防災は総合学習であり、総合科学ですから、いろんなところに結びついていくという実感はあります。

畦地：『自ら考える』ということに関して、非常に防災教育が有効だということは、防災教育を一生懸命やられるとわかってくるんだと思うんですが、それを教科の学習にどうやって活かせばいいのでしょうか。

五十嵐：結論から言うと、まだよくわかってないんですけども、防災教育は中学校においては非常に珍しい教育で、全職員が関わられるんですね。中学校は教科担当がそれぞれ分かれますので、教科の話し合いというのは基本的には教科部が行いますし、学年の話し合いは学年の職員が話し合う。全体で研修するといっても、例えば保健の先生などはあまり関わらないことがあります。ところが、防災教育というのは、全員が関わられるんです。先日、子どもたちが非常食について提案したんですけど、学校栄養士が一番張り切っていました。「そんな栄養の偏りのある料理は駄目だ」と子どもたちの提案をばっさり切っていたりしました。また、もっとびっくりしたのは、事務さんの研修会で防災教育のオフ会があったと言うんです。事務職員も興味を持っているということになると、本当に全ての職員が何らかの形で関わられるということになります。ですから、いろんな職員が、防災教育の授業をやるときにいろんな意見を出すことができる。その中に、もしかするともの凄い研修が校内で行われているのかもしれない。それによって、教員の指導技術が上がっているのかもしれないと考えています。

畦地：今『チーム学校』と言われていました。「チームとして学校を運営していきましょう」と。まさしく、今おっしゃられたのは、防災教育は『チ

ーム学校』を作るための有効な手段なのかなと思いました。防災というのは、イデオロギーとか、あまり思想が入ってこないんですね。だから、学校教育だけでなく、地域でやる時にも、全員を同じ方向に向けさせることができる。

学校教育でいうと、〇〇教育とかいろんなものがあるって、例えば人権教育なんかになると、本当に考え方の違いで背中合わせに座っているような部分がある。でも、防災教育に関しては、同じ方向に向かわざるを得ない。だから、チームとして動くツールとして、防災教育はいいものかなと、学校の現状を見ながら思っているわけです。

そういう意味では、生徒も含めて、非常に良いチームをつくって、取り組んでこられた大句先生、何か思うところはございますか。

大句：先生が子どもに「教える」という気持ちでいると、「何か教えてあげなければいけない」と思い、二の足を踏むんですが、生徒も先生も同じに考える。「今度訓練するとき、どういうふうにしたらより現実的であろうか」ということを一緒に考える。町内の地形を知っている先生と、その町内に住む子どもたちで、次の避難訓練をどうしようかと考える。どこにどんな人が住んでいるのかを子どもたちは知っているのだから、「あの方は、手を引いて一緒に避難してあげないといけないんじゃないか」と一緒に考えることで、より具体的に考えることができます。

私は、昨年度の黒潮町で開催された連絡協議会に、「自分も退職するし、どう今後につなげたらいいんだろう」という課題を持って参加しました。今思っているのは、『つながり』は私から押し付けるものではない」ということです。小木で一緒に学んできたり、一緒に行動してきたりした先生・職員が、他の学校に異動することによって、次の学校でもまた取り組む。ここにも多分いらっしゃると思うんですが、異動先の学校で取り組みにくいこともあるかもしれないけども、絶対目の前でいいことが、子どもた

ちが生き生きすることが起こると思うんです。例えば、子どもたちの成績が上がっていくなどの効果を目の当たりにしてきたので、防災教育は効果がないものではなく、その効果を実感できることがあるはずですよ。そして、それを実感したからこそ、次の職場でも小木で防災に関わった方が、新しい防災を他の学校、他の地域で広めていく。

今ここに子どもたちが書いた感想があります。「片田先生の講演を聞いた。片田先生は『東北と全く関係のない地域で、小木が防災に力を入れてくれて嬉しい』と言ってくださいました。自分も確かにそうかもしれないと思いました。なぜならば、まだ被災していないので、いろんなことを想定します。同じような取り組みをするのではなく、毎回一つひとつ避難訓練で、『次はこれ、前は失敗したから次は改善しよう』などと、訓練を行うほどに小木の防災はより良いものになっています。」と。ここからちょっと話は大きくなるんですが、「人間は遙か昔から生きる工夫をして生活をしてきたように、小木の防災も小木の住民を津波から守るために工夫を重ねているのです。普通は回数を重ねる度に気が緩み、やれるだけやればいいたいだろうと思ってしまう訓練も、私たちは常に良い方向に進化させるために、次々に改善していっています。」と書いてくれています。この子は、今高校生ですが、「今年度は、参加者を過去最大にしたいと思い、僕も参加します」と書いてくれています。

自主防災の会長は、中学生、中学校がやろうとしていることを全面的にバックアップしてくれる。どんなアンケートでも取ってもいいし、チラシをまいてもいい。毎月15日に「今日は小木地区防災の日です」と、朝8時に放送も流しています。テーマはその月によって違うんですけども、

『チーム学校』は教職員だけでなく、先生の立場とか子どもの立場とか超えて、また学校だけでなく、地域も含めてできているのではないと思います。

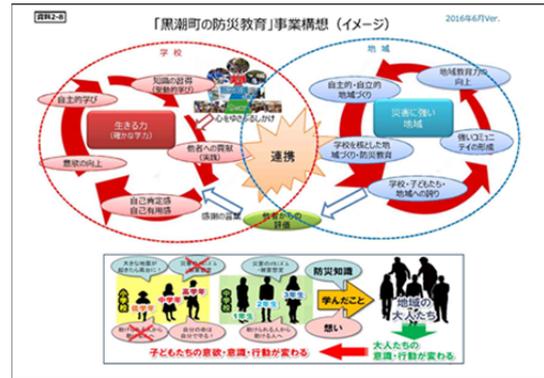
畦地：子どもたちが、学校の中だけで学ぶという行為だけではなくて、地域に出て行き、地域と協働することによって、地域がどんどん変わっていくというお話もしていただきました。

先ほど林先生から、『故郷を好きになる教育』、『防災教育で故郷を好きになる教育をしなければならぬんだ』というお話がありました。地域に子どもたちが出て行って、防災教育をすることによって、目に見えて大きな変化があったのではないですか。

林：今の私の学校でも、地域に出ていくことはもちろんあるんですけども、残念ながら防災教育としてはまだできてないです。

今の勤務校では、例えば、警察の方に来てもらって交通安全教室をやったりとか、地域の方に来てもらって踊りを教えてもらい、それを演芸会で発表したりとか、子どもたちが七夕の飾りつけをしたものを、地域の祭りで使う船に付けて出たりとかしています。地域の方は、子どもが行くと凄く喜ぶます。変化については、まだわからないんですけども、こういう活動はもの凄く大事だと思っています。

現状でも、外部ティーチャーを呼んだり、いろんな行事がある。そんななかで、私が一教師の立場で、さらに防災教育で新しいことをやるには抵抗が大きい。なので、今ある中で、地域の方に関わってもらうことをちょっとずつ増やしながら、また子どもたちが地域を好きになるような仕掛けをつくってやっていく。例えば、地域の祭りに参加したら、1ポイント付くとか。そういう形で年間を通して、いろんな行事にポイントを付けて、「〇点取ったら〇級」というように、最終的にボランティアライセンスというか免許を取得できるようにする。これによって、地域のボランティアだとか祭りなどにどんどん参加していけるような子にしていきたいなと思っています。



畦地：これは冒頭に金井先生が、「知識の防災教育から、心を揺さぶる防災教育をすることによって、子どもたちの自己肯定感などが高まる」ことを説明された図を参考にしたものです。

知識の防災教育に心を揺さぶる仕掛けをすることによって、子どもたちによる他者への貢献を実践しましょう。まさしく先ほどのボランティアなどです。そうすると、地域の人から子どもたちは感謝をされる。他者からの評価を受けるわけです。そのことが自己有用感、自己肯定感を高め、意欲を向上し自ら学ぼうとする。それが好循環を生むことによって、子どもたちの学力が上がる。

ここまでは、金井先生が先ほどご説明してくれたことと全く一緒です。私たちは、地域と連携をすることによって、地域も変わっていくのではないかと考えているわけです。つまり、学校を核とした地域づくり、防災教育をすることによって、大人たちが子どもたちを評価するわけです。自分たちの小学校、中学校を凄く誇りに思うし、自分たちの地域の子どもに対する誇りが生まれる。そうすると、地域の結束力が高まり、強いコミュニティになる。それによって、さらに地域の教育力も上がるのではないのか。こうなると、『災害に強い地域づくり』は行政任せにせずに、そこに住んでいる者たちが自らで地域づくりをしていこうとなって、さらに地域自体が災害に強い地域になっていく。

学校の赤いループと、地域の青いループがお互い共鳴し合い、無限大(∞)を描きながら、

地域づくりをしていくことが、今我々黒潮町が防災教育を進める時のイメージです。

34 メートルの想定を受けた私たちの町は、保母さんや調理師さんも入れて、職員が200人くらいいます。その職員全員を町内全64集落に、担当職員として割り振っている。その集落に入っていくって、啓発活動とかもするんですけど、やはり役場の職員が行っても限界があるんです。言うこと聞いてもらえないんです。ところが、昨年、片田先生にも来て頂いて、地区防災計画シンポジウムをやった時に、某小学校の6年生が発表したんです。それを聞いた大人が非常に感動したんです。そこにいた町長も、「やっぱり子どもの力は凄い」と。役場の職員が100回言うよりも、子どもが一言言うほうがよっぽど教育効果が高いということです。今年は、子どもたちが、地域の先生役になれないかということで、片田先生にもご指導頂きながら進めているところなんです。

その発表した6年生の子たちは、小学校1年生の時には、その学校始まって以来の大変な学年だと言われていました。それが、防災教育をやることによって、1年生の時からあの子どもたちを知っている人たちがびっくりするぐらい、子どもたちが成長した。それぐらい防災教育をやって子どもたちも変わったということなんです。

今後は、学校だけで連携するのではなくて、どうやって地域と連携をしていくかが重要なテーマになってくると思っているのですが、どうでしょうか。

森本：釜石東中学校で最初に学年レベルで防災教育を始めた時に、教育委員会の方だけでなく、一番大きかったのは、市の消防防災課に協力してもらえたことです。片田先生が講演をしたり、ワーキンググループの会議には、必ず市の防災課の方がいらっしやっていたんです。それで、「何かあれば私に」と言ってくれていました。それで、私は学校の防災教育担当者なので、

市役所にしょっちゅう電話をするわけです。地域に出て行きたいときや、防災ボランティアを展開するときなどに、「子どもたちのアイデアがこうで、先生方のアイデアがこうなんだけど、これを実現するためにはどうしたらいいでしょう」と。そうすると、消防防災課の方が、「今、自主防災組織を立ち上げているから、そこと連携したらどうか」とか、「この地区であれば、この方が核になるから、連絡してみよう」とかアドバイスしてくる。また、「これは消防防災課ではなく、福祉課を紹介するよ」とか、「こっちは日赤でここに行けばいいから」とか市役所内でもつながりが広がるわけです。

その次の段階になってくると、子どもたちがアンケートを1,000軒に配布しようなんて計画をたてた時には、地域毎に地域の方々が集まって協力してくれるわけです。そして、先生方も、細かいこと言わずに、「じゃあ、うちの地区は僕がやります」とか言ってくれるようになる。

私の場合は、地域との突破口になってくれたのは市役所で、そこを介して、地域の核になる方々とつながり、その方々と学校がいろいろやっていくことで、いろんな展開ができたなと思いました。

子どもたちは「自分たちがやった」、「生徒主体の活動だ」と思っていますが、その子どもたちからも、「自分たちから地域の方々に関わっていったのが、非常に大きかった」と言っています。それまで、こういう機会がなければ、中学生は思春期ということもあり、どう関わっていかわからなかった。それが「地域の防災のために」とアンケートを配るわけです。いろんな活動をするわけです。それによって、地域の人に声を掛けることができた。そうすると、また次の機会にも声をかけられる。「自分から関わることができる学習で良かった」という言い方をしていましたが、こういった相乗効果が生まれつつあったのが、震災前の釜石東中学校だったかなと思っています。